

これからのチャイルド・スタディーズを展望して①

「子どもと医療と保育」の学び

松島のり子

(大学教員)

2018年4月、お茶の水女子大学に子ども学コースが発足した。この春で3年目を迎える。コースの担当教員は4人。ゼロからの創出や、従来の蓄積の刷新により、先生方と共に新しいコースを築いていくことは、今しかできない貴重な経験となっている。ただ、私自身は、学内業務をはじめ、研究も教育も暗中模索の連続で、いまだ足元がおぼつかない。人間が3歳の誕生日を迎える頃と比べると、自らの足どりがいかにゆっくりしたものであるかを痛感させられる。

それでも、「子ども学」を担う一人として、2年間という月日を過ごしてきた。講義、研究、学生や先生方との話し合い、学外の方々とのかわり、子どもたちとの出会い……、さまざまな経験を重ねてきている。そうした、私にとっての日常の中から、以下では、2019年度前期に担当した「子どもと医療と保育」という演習科目の足跡を振り返ってみたいと思う。

LA演習「子どもと医療と保育」の開講

2019年度の前期に、学内で分担するリベラルアーツ演習(LA演習)を担当することになった。主に1年生が履修する科目で、例年、文理融合の多様なテーマで開講されている。担当教

員は専門分野にかかわって柔軟にテーマを設定できることから、私は「子どもと医療と保育」で実施することにした。自身の専門は、保育・幼児教育の、制度や政策の、歴史である。「子どもと医療と保育」とのつながりは遠いように思われるかもしれない。

しかし、私が教育・研究に取り組む根底には、すべての子どもが幸せであってほしいという願いがある。そのことに立ち戻ったとき、これまで着目してきたのは、幼稚園や保育所といった制度化された保育施設であり、制度の枠を超えた領域に目を向けられていないという限界を感じるに至った。そこで関心を寄せたのが、病気の治療等のために保育施設に通うことが難しい子どもたちへの、保育の保障についてであった。

医療保育を知る——文献講読・議論

初回はこれまでにない緊張感と共に、少々思い切った挑戦をするような気持ちで臨むこととなった。第2回以降、履修者は学部・学科を越え、上級生4人を含む14人を迎えた。

まず、前半は文献講読に取り組んだ。院内学級、医療の場における保育、病気を抱える子ども、医療の場における保育の専門家、医療の場における保育の専門性、これらのテーマに関する文献や論文を事前に読み、学生があらかじめまとめた小レポートをもとに演習の時間に議論した。

医療の場で過ごす子どものために保育の専門家が携わっていること自体、まだ十分に浸透していないのが現状であり、学生が初めて知ることでも少なくなかったようである。読み、考え、話しあうことを通して、病気を抱える子どもへの思い、家族やきょうだいに對する働き掛けや支援、医療保育専門士やチャイルド・ライフ・スペシャリストといった専門家、医療の場における保育や

保育者をめぐる課題等、まずは「知ること」に重きを置いた。この過程では理解が進む一方で、疑問点や詳細を知りたい事項も数多く挙げられた。

対話を重ねる——インタビュー・調査・発表

そこで次の段階として、インタビューの機会を設けた。実際に病院に勤める医療保育専門士の方を迎え、病院内の保育環境を紹介していただき、学生の質問にも答えていただいた。学生の質問は、例えば、他職種の連携が求められる医療保育の場における役割分担や連携の実際、医療保育専門士になるまでの過程、日々の医療保育の実践において心がけていること、医療保育専門士としてのやりがいなど、多岐にわたった。実際に当事者の話を聴けたことは、文献や論文等で得られる情報とはまた異なる形で学生に響いたのではないかと思う。

前半の情報受容とインタビューを経て、後半は、学び考えてきた内容を発信する方針で進めた。そのため、履修学生14名を関心の近いメンバーでグループに分け、疑問点や詳細を知りたい内容の調査を加えて、医療保育の紹介も兼ねた資料作成と発表に取り組むこととした。各グループのテーマは、「医療保育士ができること」「医療を要する子どもに対するアプローチと子どもの居場所について」「入院中の学びの保障」「海外と比較した日本の医療保育」となった。

実際に調べ始めてみると、得られる情報が限られ、なかなか知りたい情報にたどり着けないグループもあった。それでも今ままで取り上げてきた文献や資料を見直したり、手にできた資料を駆使したりと、グループで取り組む強みを生かして調査が続いた。最終的には伝える工夫を含めて資料が仕上がりに、無事に発表まで行うことができた。最終回には他のLA演習科目との合同発表

会があり、より多くの学生に向けて医療保育について紹介することもできた。

「子どもと医療と保育」との「対話」

半期にわたるLA演習「子どもと医療と保育」を振り返ると、履修学生と共に、私自身もさまざまな学ばせていただいた。学生や自ら、そして「子どもと医療と保育」というテーマとも「対話」できたことで、あらためて、「子ども」や「保育」について考える時間をもつことができた。子どもにとって「保育」という営みはいかなる意義をもつのか、本質に迫り得る契機にもなった。医療を要する子どもにも保育は大切であり、保育による生活の質（QOL）の向上は、治療へ向かう原動力となり得る。医療の場において、子どもや遊びの専門家でもある保育者が専門性を発揮することで、支えられ救われる子どもや家族がいる。多くの保育施設で、子どもが育つための環境が大切にされているのと同じように、医療を要する子どものための「保育環境」が整えられることも重要であり、これからの課題である。どれも、今一度じっくり考えてみたい事項である。また、医療保育専門士の方との後日談で、「（医療の場でも）遊びは子どもの活力になる」と、力強く話されていたことも印象に残っている。

こうした成果の一方で、すべての子どもが幸せであってほしいという大きな願いに対し、自らがとても小さな存在であることも実感することになった。「子どもと医療と保育」の学びを礎に、今後子どもや保育、学生や保育者等、多様な他者や対象との対話を重ねていきたい。そして、大きな願いの実現に向けて、小さな一歩でも前に進めるよう、「子ども学」を通して考え続けていきたい。